

体育授業に対する学習戦略のモデル構築

—中学校生徒を対象にして—

長田 則子*, 梅野 圭史**, 池上 哲也***, 小林 徹****

(平成27年6月15日受付, 平成27年12月1日受理)

A Development of the Model for Learning Strategy toward Physical Education Classes : As the Subjects of Second Grades Students in Junior High School

NAGATA Noriko *, UMENO Keiji **, IKEGAMI Tetsuya ***, KOBAYASHI Toru ****

The purpose of this study was to examine a development of the model for leaning strategy toward physical education classes using by principal component analysis. Subjects of this study were 768 junior high school students. The questionnaires as learning strategies tests (85 items) consist of 32 learning skills and 3 strategies in P.E.classes, based on O'Malley and Chamot's study.

The first component could be named "learning strategy to perceived physical competence". It was shown that "learning strategy to perceived competence" was supported by 2 subordinate concepts. One was learning strategy of feeling good practice with peer co-operation at the movement and learning strategy of understanding for movements, the other was learning strategy of gathering and using information for problem-solving.

It was able to confirm that junior high school students faced the P.E. classes with the learning strategies.

Key Words : leraning strategy physical education classes junior high school students

I. はじめに

1980年代以降, わが国ではプロセス・プロダクト研究法の発展に伴って授業の分析的研究が飛躍的に進展した(厚東ら, 2010)⁽¹⁾。とりわけ, 体育科教育分野では, 児童・生徒の授業に対する自発的・主体的な学習行為を引き出し育む授業研究(小林, 1978; 梅野・辻野, 1980; 奥村ら, 1989; 鐘ヶ江ら, 1985a; 1985b; 1985c)⁽²⁾⁻⁽⁷⁾を中核として, 児童・生徒の技能や学習集団機能を高める教師の教授活動に関する検討が数多くなされてきた(梅野ら, 1986, 1997; 辻ら, 1999; 上原ら, 2003; 高橋ら, 1989, 1992, 2000; 大友ら, 1993; 深見ら, 1997; 福々迫ら, 2003)⁽⁸⁾⁻⁽¹⁷⁾。

近年になって, すぐれた教師の教授活動の展開には, 意図的・計画的な教授戦略が立てられている可能性が高いとする予想から, 経済学におけるゲーム理論を教授学的に改変し, 体育授業の分析的研究に適用した山口ら(2006, 2010, 2012)⁽¹⁸⁾⁻⁽²⁰⁾の一連の研究が認められるようになってきた。具体的には, スクリーニング, インセンティブ, シグナリング, ロック・イン, コミットメント, モニタリングの計6つの教授戦略とそれらを意図的・計画的に組み合わせる教授戦略の発揮である。とりわけ,

これら6つの教授戦略の発揮には, 教材である運動の知識と児童・生徒のつまずきの類型とその対処に関する知識が不可欠であることが確認され, すぐれた学習成果を修める教師ほど用いる教授戦略が多いことを認めている。

このように, 「教える」者としての教師が意図的・計画的に教授戦略を立てて授業に臨んでいるとすれば, 「学ぶ」者としての児童・生徒も何らかの学習戦略(学び方)と学習戦略(学習目的を達成させるために幾多の学習戦略を駆使する企て)^(注1)を立てて授業に臨む必要がある。なぜなら, 教授活動の戦略性が高まれば高まるほど, 教師の「教授」姿勢が強化され, これによって児童・生徒の「学ぶ」姿勢が「教わる」姿勢に移行する傾向が強くなるからである。それ故, 児童・生徒は, 自らの学習目的の達成を自立的に進めていく学習力を高めていかなければならない。これを経験的に語れば, 長岡が主張する「腰の強い授業」という表現になる。すなわち, 長岡は多年にわたる実践経験から, 「腰の強い授業」に対する哲学的思索を次のように展開させている。

「私は、『腰の強い授業』ということ, 『自らが納得しないことには動かない』ことだととらえている。つまり,

* 宝塚医療大学 (Tkakarazuka University of Medical and Health Care)

** 鳴門教育大学 (Naruto University of Education)

*** 岡山市立旭操小学校 (Kyokuso Elementary School)

**** 御殿場市立御殿場中学校 (Gotenba Junior Hignschool)

『だまされない』ことであり、『納得いくまで追求をやめない』こと、何より『自ら追究すること』である。」

こうした考えにもとづいて、「腰の強い授業」を実現していく方途として、教師の側からは「教えないで、学習法を創造させる」ことであり、児童の側からは「個性的で納得いくまで追求し、仲間と自らの学習法を創造し合う」こととしている（長岡，1990）⁽²¹⁾。

本研究は、後者の立場を採る。

学習戦術（学び方）に関する研究は、主として第2言語習得研究の中で発展してきた（竹内，2003）⁽²²⁾。具体的には、1970年代後半から1980年代後半にかけて、「学習方略」と称して「すぐれた学習者」の学習戦術（学び方）が追求されていた。この手の研究は、「ラーナーズ・ストラテジー研究」と呼ばれている。その後、1990年代から現在に至る過程では、学習者の学習過程と学習成果との関係に着目し、学習成果を高める学習者の認知スタイルを基軸とした「ラーニング・ストラテジー研究」へと駒が進められた。すなわち、「認知的領域」、「社会的領域」、「情意的領域」の3つを基軸に、学習者の多様性に対応する「ラーニングスキル」の開発に力が注がれてきている。

これまで体育科では、自発的・主体的に「運動を学ぶ学習力」とその方法に関する研究・実践を認めることができるが^(注2)、それらの数は少なく、1980年代に集中する傾向にあった。さらに、体育授業における具体的な学び方に関する論考が少なく、児童・生徒の身体操作に不可避である彼らの認知スタイルを改善させる学び方に関する論述は皆無であった。これより、第2言語習得研究にみる「ラーニングスキル」の開発の成果を参考に、体育科における学習戦術（学び方）研究を独自に進めていく必要がある。

ところで、第2言語を習得するための学習戦術（学び方）は、言語に関する知識の理解を主軸とするのに対して、体育科の学習戦術（学び方）は、運動技能の学習（練習）を主軸とする。これより、第2言語習得に関わる学習戦術（学び方）をそのまま体育科の学習戦術（学び方）に援用するには困難性が高い。これを解消するべく、池上ら（2010）⁽²³⁾は、北米における第2言語習得研究の代表的な研究者である O'Malley & Chamot（1990）⁽²⁴⁾、Oxford（1990）⁽²⁵⁾ および Cohen（1998）⁽²⁶⁾ の学習戦術（学び方）の構造分析を通して、体育授業への援用可能性を検討した。その結果、Oxford（1990）および Cohen（1998）の研究は、第2言語習得学習に特化させた内容であることから、体育授業への援用は困難と判断した。これに対して、O'Malley & Chamot（1990）の学習戦術（学び方）の構造は、他の教科における知識学習や技能学習に適用可能なものであり、しかも体育科の目標構造（高橋，1992）⁽²⁷⁾ ときわめてよく対応することが認められた。そこで、O'Malley & Chamotが示した学習戦術（学び方）の構造を支える「ラー

ニングスキル」を体育授業に適用できるように読み替え、これらを「日本学び方研究会」が例示する行動様式としての学び方と対応させた。その結果、資料①、②、③に示すように、3つのラーニング・ストラテジー分類属（①メタ認知＜課題形成場面での学び方＞、②認知＜課題解決場面での学び方＞、③社会＜学習集団内での学び方＞・情意＜喜びや楽しさ、努力や自信などを得る学び方＞）を基盤に、32個からなるラーニングスキルにもとづく85個の体育授業における学び方を作成した。

しかしながら、作成した85個の学び方が実際の体育授業の学習戦術（学び方）になり得るのかどうかまでは検討されていない。児童・生徒の「運動を学ぶ学習力」を高めていく手立てを具体的に追求していくためには、彼らの学習戦術（学び方）がどのように形成されているのかを把握しておく必要がある。

そこで本研究は、児童・生徒の学習戦略の能力を育成する実践研究の第一歩として、中学2学年の生徒を対象に彼らの体育授業における学習戦術（学び方）を主成分分析法により明らかにし、そこで得られた学習戦術としての成分がどのような戦略的な構造を有しているのかについて検討した。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査の対象は、徳島県下並びに静岡県下の9中学校の2年生22学級に所属する計768名（男子398名、女子370名）である。ここで、中学2学年の生徒を対象とした理由を示せば、①体育授業に対する態度構造が確かに形成されていること（小林：1978、鐘ヶ江ら：1985）⁽²⁾、⁽⁶⁾から、自分から運動を主体的に学ぶ構えが形成されていると考えられること、②中学校期における生徒の体育授業における学習戦術（学び方）の典型を求めようとする考えがあること、の2点である。ちなみに、後述するように調査時期も、学年末の2月上旬から下旬にかけて行った。

調査の対象となった22学級のうち、8学級が国立大学の附属中学校であり、14学級が公立中学校であった。また、4学級は男女共習の学級であり、18学級は男女別習の学級であった。

調査対象とした学級を担当する体育教師18名のうち、教職経験年数が1年～4年以下が3名、5年～8年以下が1名、17年以上が14名であり、ベテランの教師がきわめて多い結果であった。また、教員の男女の内訳は、男性教師が17名、女性教師は1名であり、極端に女性教師の少ない結果であった。これらのことから、本研究の結果は、ベテランの男性教員による影響下にあることは否めない。反面、本調査結果はベテランの教師の下で形成される学習戦術（学び方）となることから、児童・生徒の「運動を学ぶ学習力」を高めていく手立てを具体的に追求して

いく一つの指標になり得るものと考えられる。これより、教職経験年数1年～8年の若い教師の下で授業を受ける生徒の追加調査を実施することはしなかった。

2. 「体育授業における学び方調査」票の作成と調査の方法

「体育授業における学び方調査」票は、資料①, ②, ③に示す85個の学び方を質問項目として編纂した。そこで用いた回答尺度は、織田(1970)⁽²⁸⁾の研究結果にもとづいて7段階とした。すなわち、各質問項目に対して「いつもそのようにしようと思っている」：7点から、「そのようなことはまったくしていない」：1点までとした。

調査は、2010年2月上旬から下旬にかけて、「体育授業における学び方調査」票を用いて実施した。このとき、対象の生徒には特定の単元や時期を限定せず、2学年に進級した年度当初からの体育授業を振り返って回答してもらった。

3. 分析の手順

①リッカート方式による項目分析(安田, 1974)⁽²⁹⁾を施し、調査で用いた85項目が生徒の体育授業における学び方を問う項目なのかどうかを判定する。すなわち、85項目に対する回答の合計得点が最も高い生徒を始めとする上位群(全体の4分の1に相当する192名)と最も低い生徒を始めとする下位群(全体の4分の1に相当する192名)を抽出し、両者の回答結果にカイ二乗検定を適用し、「体育授業における学び方調査」票の項目の適合性を判定する。

②質問項目として適合性が認められた項目に対する回答結果に対して主成分分析を行い、体育授業に対する生徒の学習戦術(学び方)の成分を検討する。これには、「体育授業」を受ける学習者の学習戦術(学び方)がどのような成分構造になっているのかを検討し、続いてこれらの学習戦術(学び方)がどのような戦略的構造を成しているのかとする学習戦略モデルを検討する本研究の目的より、主因子解による分析方法でなく、主成分解による方法が適当と考えられたことによる。

成分数の決定は固有値が1.0以上とし、その解釈・命名に際しては、0.400以上の負荷量を有する項目を採択する。また、抽出された成分の内的整合性は、Cronbachの α 係数により検討する。

③上記②の主成分分析の結果にもとづいて重回帰分析を行い、学習戦術(学び方)成分の構造を検討する。ここでは、まず第1成分を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行い、本調査の対象である生徒の学習戦術(学び方)の中心構造を検討する。その後、上記の検討より外れた学習戦術(学び方)の成分があれば、それらを目的変数に据える重回帰分析を行い、学習戦略モデルを検討する。いずれも、ステップワイズの基準は、

変数の投入基準を有意確率0.05以下とし、除去基準を有意確率0.1以上とした。

上記②および③の統計処理に際しては、Windows対応ソフトSPSS16.0を用いた。

Ⅲ. 結果ならびに考察

1. リッカート方式による項目分析の結果

リッカート方式による項目分析の結果、85項目すべてにおいて上位群と下位群の回答結果に1%水準で有意差が認められた。これより、池上ら(2010)⁽²³⁾が作成した85個の学び方項目は、体育授業における学び方として妥当性のあることが確かめられた。

2. 学習戦術(学び方)成分の解釈

表1には、主成分分析の結果を示している。第10成分まで抽出され、それら成分の累積寄与率は62.05%であった。そのうち、第7成分まで解釈・命名することが可能であった。本来ならば、これらの結果をすべて掲載すべきところであるが、表1を1頁に収めるときわめて読みにくいものとなるため、成分解釈に要した学び方項目を記載するに留めた。

① 第1成分

この成分では、78番、76番、80番の3項目に高い負荷量が認められた。これらの項目は、資料③より「自分たちの学習活動が目標達成に向かっていくかどうかを自己対話する」ラーニングスキルに属するものであった。また、77番、85番、79番の3項目にも高い負荷量が認められた。これらの項目は、同じく資料③より「目標達成に向かっていく中で、発生する障壁を乗り越えているかどうかを自己対話する」ラーニングスキルに属するものであった。

また、いずれの項目も運動がうまくできるようになった成就感や満足感に関する文言や、努力すればできるようになるとする自信や自覚に関する文言を伴った学び方であることから、岡沢ら(1996)⁽³⁰⁾が導出した3つの「運動有能感の因子」のうち、「身体的有能さ」と「統制感」の因子と酷似する結果が得られた。

これらのことから、第1成分は総じて「有能感を味わうための学び方」の成分と解釈・命名した。

② 第2成分

この成分では、23番と21番、22番と24番の4項目に高い負荷量が認められた。資料①より、前者の項目は「練習のしかたの良し悪しから理解度をチェックする」ラーニングスキルに属するものであり、後者の項目は「学習成果の良し悪しから、運動のしかたの理解度をチェックする」ラーニングスキルに属するものであった。加えて、「学習の道すじからレビューする」ラーニングスキルに属する18番と、「学習成果からレビューする」ラーニングスキルに属する20番にも高い負荷量にあることが認めら

れた。

以上の6項目は、体育の授業で課題（めあて）や練習のしかたの良し悪しとその成果をレビュー（評価）する学習戦術（学び方）であるものと考えられた。これより、第2成分は総じて「課題（めあて）や練習の良し悪しを判断する学び方」の成分と解釈・命名した。

③ 第3成分

この成分では、50番と45番、43番と47番の4項目に高い負荷量が認められた。資料②より、前者の項目は「良い動きや、良いプレイをイメージして、練習したりゲームしたりする」ラーニングスキルに属するものであり、後者の項目は「うまくなるための必要な情報をまとめる」ラーニングスキルに属するものであった。加えて、55番と54番の2項目においても高い負荷量が認められ、これらの項目も、資料②より「新しい運動教材を容易に解決するために既習の学習を活用する」ラーニングスキルに属するものであった。

以上の6項目は、体育授業で用いられた参考資料や、仲間や自分の動きやプレイの映像、過去に経験した運動における学習を情報としてとらえ、活用しようとする学習戦術（学び方）であるものと解せられた。これより、第3成分は総じて「情報を収集・活用する学び方」の成分と解釈・命名した。

④ 第4成分

この成分では、35番、37番、40番の3項目に高い負荷量が認められた。これらの項目は、資料②より「うまくできないところを直すために、仲間の動きやプレイ、先生や仲間からのアドバイスをを用いる」ラーニングスキルに属するものであった。

これら以外に49番と36番の2項目に高い負荷量が認められた。これらの項目は、同じく資料②より、それぞれ「良い動きや、良いプレイをイメージして、練習したりゲームしたりする」と「うまくなるために、運動の用語、知識、原理を理解する」のラーニングスキルに属するものであった。ここで、これらの項目内容をみると、49番では「うまくできる子ども」、36番では「仲間の動き」が認められ、いずれも仲間との学びを意識した学び方が内包されているものであった。

これらことから、第4成分はうまくできる子や仲間の動きとプレイを観察・比較する学習戦術（学び方）であるものと解せられ、「仲間の動きやプレイを観る学び方」の成分と解釈・命名した。

⑤ 第5成分

この成分では、27番、28番、34番の3項目に高い負荷量が認められ、いずれも資料②より「うまくなるために、運動の用語、知識、原理を理解する」ラーニングスキルに属するものであった。また、25番と30番の2項目にも高い負荷量が認められ、これらの項目は、同じく資料②

より「先生に教わったことを繰り返して身につける」ラーニングスキルに属するものであった。

残る26番は、資料②より「自分の運動を振り返り、うまくできないところを繰り返し練習する」ラーニングスキルに属する項目であるため、これをどのように解釈するかが問題となってくる。

ここで26番の項目内容をみると、「自分たちの立てた計画や予想の通りにできなかった時」という条件が付記されている。これに対して、25番と30番は、「うまくできなかった」とする負の条件はなく、教師から指導された運動を習得する学び方が記されている。しかしながら、26番の学び方には「休み時間や放課後を利用して練習する」という表現が認められる。この表現は、25番の「いつでもどこでもできるようになるまで、練習したりゲームしたりする」ならびに30番の「何度も練習して身につける」の表現と類似する。

これらことから、第5成分は運動の「わかり」を身体に移す学習戦術（学び方）であるものと考えられた。これより、第5成分は総じて「運動のわかりを身体に移す学び方」の成分と解釈・命名した。

⑥ 第6成分

この成分では、69番と68番、64番と62番の4項目の項目は「仲間の考えや意見を大事にする」ラーニングスキルに属するものであり、後者の項目は「仲間と共に課題（めあて）を解決する」ラーニングスキルに属するものであった。

加えて、70番と71番の2項目においても高い負荷量が認められ、これらは「先生や仲間尋ねたり質問したりする」ラーニングスキルに属する項目であった。これらの内容から、この成分は「仲間と共にうまくなる学び方」と考えられた。

ところで、69番では「わがままや勝手な考えや意見」という文言が、68番では「一部の仲間の意見だけ」といった文言が認められ、いずれも学習集団の育成に障壁となる要因を乗り越える内容となっている。これに類する学び方として、73番にも負荷量の高いことが認められた。ここでは「うまくできないとき」とする負の条件が付記されている。

これらことから、第6成分は学級集団を一つの学習集団として高めていこうとする学び方と解せられた。すなわち、この成分は総じて「うまくできない仲間」、「わがままな仲間」、「自分勝手な仲間」と共に先生と一緒になっとうまくなる学習戦術（学び方）であると考えられた。これより、第6成分は「仲間と共にみんながうまくなる学び方」の成分と解釈・命名した。

⑦ 第7成分

この成分では、6番と7番、8番と4番の4項目に高い負荷量が認められた。資料①より、前者の項目は「教師

表 1. 主成分分析の結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII	h ²
第1成分 有能感を味わうための学び方 (α係数:0.914)								
77 体育の授業では、うまくできる楽しさやよろこびを味わってやろうと思っている。	0.742							0.725
78 体育の授業では、「あっそうか、わかった！」という発見のよろこびや、「やった、できた！」といううまくできたよろこびを自分の力で味わおうとする。	0.712							0.687
76 体育の授業では、練習やゲームを重ねることに自分の動きやプレイがだんだんうまくなっていく自覚をもてるように努力している。	0.666							0.707
80 体育の授業では、「あっそうかわかった」「こうすればいいんだ」という発見を忘れずに自分のものにする。	0.664							0.686
85 体育の授業では、うまくできるよろこび、運動のしぐみがわかるよろこび、仲間と関わるよろこびの大切さを知って、それらのよろこびを自力で味わおうとする。	0.653							0.693
79 体育の授業では、あらかじめ何度か練習してうまくできるようになったとき、自信(自分もやればできる)やプライド(僕も大した人間だ)を持つ。	0.637							0.635
第2成分 課題(めあて)や練習のよし悪しを判断する学び方 (α係数:0.896)								
23 体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた予想や計画の通りにできるようになったかどうかを確かめる。	0.722							0.688
22 体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた課題(めあて)が解決したかどうか(うまくなったかどうか)を確かめる。	0.714							0.695
24 体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、課題(めあて)の解決ができなかった時、どこまでできていて、どこからできていないのか確かめる。	0.652							0.640
18 体育の授業では、オリエンテーションで教わった計画の立て方を生かして、自分たちで考えた練習のしかたを工夫する。	0.597							0.637
21 体育の授業では、先生や仲間と話し合った運動のしかたや練習の方法のよし悪しを考える。	0.587							0.633
20 体育の授業では、うまくいった方法から、課題(めあて)や練習のしかたのよし悪しを考える。	0.583							0.594
第3成分 情報を収集・活用する学び方 (α係数:0.713)								
50 体育の授業では、うまくなるために、ビデオやデジカメなどを使って自分の動きやプレイを振り返り、練習したりゲームしたりする。	0.639							0.508
43 体育の授業では、先生が用意した学習プリントまたは書物(教科書を含む)やインターネットで調べたことを本当に正しかったかどうかを確かめながら、練習したりゲームしたりする。	0.566							0.627
55 体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、良い動きや良いプレイができるようなルールを考える。	0.566							0.596
54 体育の授業では、うまくなるために、これまでに習った似たような運動の構造(しぐみ)を考え、練習したりゲームしたりする。	0.512							0.649
47 体育の授業では、先生の用意した学習資料(教科書を含む)などにある絵や写真から比べ方を考えたり、練習している仲間の動きやプレイの観察から、比べ方を考えたりする。	0.495							0.578
45 体育の授業では、うまくなるために、仲間の動きをまねたり、ゲームの途中でプレイを止めてどうすべきだったか仲間と考えたりしながら、練習したりゲームしたりする。	0.488							0.543
第4成分 仲間の動きやプレイを観る学び方 (α係数:0.902)								
35 体育の授業では、うまくできる子たちの動きやプレイを見て、自分の動きやプレイの違いをさがし、練習したりゲームしたりする。	0.592							0.695
37 体育の授業では、うまくできる子たちの動きやプレイを見て、共通しているところや違うところをさがし、練習したりゲームしたりする。	0.584							0.719
49 体育の授業では、うまくできる子の動きやプレイをいつも観察しながら、練習したりゲームしたりする。	0.557							0.655
36 体育の授業では、練習の中で仲間の動きを比較して、うまくなるためのコツをはっきりと見つけ出そうとする。	0.549							0.714
40 体育の授業では、仲間の動きやプレイを見たり、先生や仲間のアドバイスする声を聞いたりして、自分の動きやプレイを変える。	0.521							0.622
第5成分 運動のわかりを身体に移す学び方 (α係数:0.765)								
27 体育の授業では、教材である運動の構造(しぐみ)を知って練習したりゲームしたりする。	0.601							0.646
25 体育の授業では、習っている運動の動きやプレイが、いつでもどこでもできるようになるまで、練習したりゲームしたりする。	0.561							0.596
26 体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた予想や計画の通りにできなかった時、休み時間や放課後を利用して練習する。	0.537							0.571
28 体育の授業では、練習したりゲームする中で、教材である運動の最も大切な内容がわかる努力をしている。	0.489							0.596
34 体育の授業では、教材である運動の構造(しぐみ)の一番大切な内容を考え、練習したりゲームしたりする。	0.481							0.655
30 体育の授業の終わりまで、良い動きや良いプレイを何度も練習して身につける。	0.456							0.635
第6成分 仲間と共にみんながうまくなる学び方 (α係数:0.801)								
69 体育の授業では、わがままや勝手な考えや意見が出たとき、その仲間に注意する。	0.640							0.601
64 体育の授業では、自分から進んで仲間に補助したり仲間にアドバイスしたりする。	0.590							0.664
68 体育の授業では、グループで話し合うとき、一部の仲間の意見だけで進まないように、自ら進んで意見を言うようにする。	0.569							0.613
70 体育の授業では、先生の課題(めあて)についての説明がわからないとき、質問する。	0.542							0.614
62 体育の授業では、発表するときは自分の思い、考え、意見を素直に言うようにする。	0.540							0.567
73 体育の授業では、うまくできないとき、先生や仲間にもてもらう。	0.442							0.614
71 体育の授業では、うまくできないとき、どこができていないのかを先生や仲間尋ねる。	0.433							0.607
第7成分 教師の意図をさぐる学び方 (α係数:0.847)								
6 体育の授業では、自分の考える課題(めあて)が先生の指導内容と合っているのかいないのかを考えようとする。	0.699							0.595
7 体育の授業では、先生の考える課題(めあて)を明確に知るようにする。	0.653							0.637
8 体育の授業では、なぜそのような課題(めあて)で学習するのかについて考えるようにする。	0.515							0.580
4 体育の授業では、練習の仕方予想を立てようとしている。	0.418							0.548
分散(%)	12.72	10.46	8.52	6.76	5.64	5.22	4.24	
累積寄与率(%)	12.72	23.18	31.70	38.46	44.11	49.32	53.56	

の提示・暗示・示唆の内容を考えて課題(めあて)を立てる」ラーニングスキルに属するものであり、後者の項目は「課題(めあて)の意味をわかって、課題(めあて)を立てる」ラーニングスキルに属するものであった。

これら4項目は、教師の意図をさぐったり知ったりして体育授業を受けようとする学習戦術(学び方)と解せられ、第7成分は「教師の意図をさぐる学び方」の成分と解釈・命名した。

成分の内的整合性をみる α 係数は、表1の成分名の横に括弧で示している。これより、7つの成分のいずれもが0.700以上であるため、本研究の主成分分析の結果には一定の信頼性が担保されているものと考えられた。

以上のことから、中学2年生を対象にした体育授業に

対する学習戦術(学び方)は、7つの成分により構成されていることが認められた。とりわけ、今回用いた主成分分析法の特性から、第1成分として取り出された「有能感を味わうための学び方」は、残りの6つの成分の上位概念として構成されているものと考えられた。

3. 学習戦略モデルの検討

ここでは、第1成分である「有能感を味わうための学び方(C1)」を目的変数に置き、残りの6つの学習戦術(学び方)を説明変数とする重回帰分析を施し、本調査対象者の学習戦略モデルを検討した。表2には、重回帰分析の結果を示している。

このように、「有能感を味わうための学び方(C1)」は、「仲

表2 「有能感を味わうための学び方」に対する重回帰分析の結果

目的変数	説明変数					
	R	R2	β	t	F	P
C1 有能感を味わうための学び方	0.804	0.647			349.73	P<0.001
C4 仲間の動きやプレイを観る学び方			0.383	11.80		
C6 仲間と共にみんながうまくなる学び方			0.325	10.83		
C2 課題(めあて)や練習の良し悪しを判断する学び方			0.148	4.74		
C5 運動のわかりを身体に移す学び方			0.078	2.58		

表3 「情報を収集・活用する学び方」に対する重回帰分析の結果

目的変数	説明変数					
	R	R2	β	t	F	P
C3 情報を収集・活用する学び方	0.673	0.453			126.28	P<0.001
C5 運動のわかりを身体に移す学び方			0.269	7.08		
C6 仲間と共にみんながうまくなる学び方			0.228	6.03		
C2 課題(めあて)や練習の良し悪しを判断する学び方			0.130	3.16		
C7 教師の意図をさぐる学び方			0.106	3.02		
C4 仲間の動きやプレイを観る学び方			0.083	2.04		

表4 「教師の意図をさぐる学び方」に対する重回帰分析の結果

目的変数	説明変数					
	R	R2	β	t	F	P
C7 教師の意図をさぐる学び方	0.647	0.418			137.01	P<0.001
C2 課題(めあて)や練習の良し悪しを判断する学び方			0.399	10.74		
C6 仲間と共にみんながうまくなる学び方			0.141	3.68		
C3 情報を収集・活用する学び方			0.117	3.15		
C5 運動のわかりを身体に移す学び方			0.103	2.62		

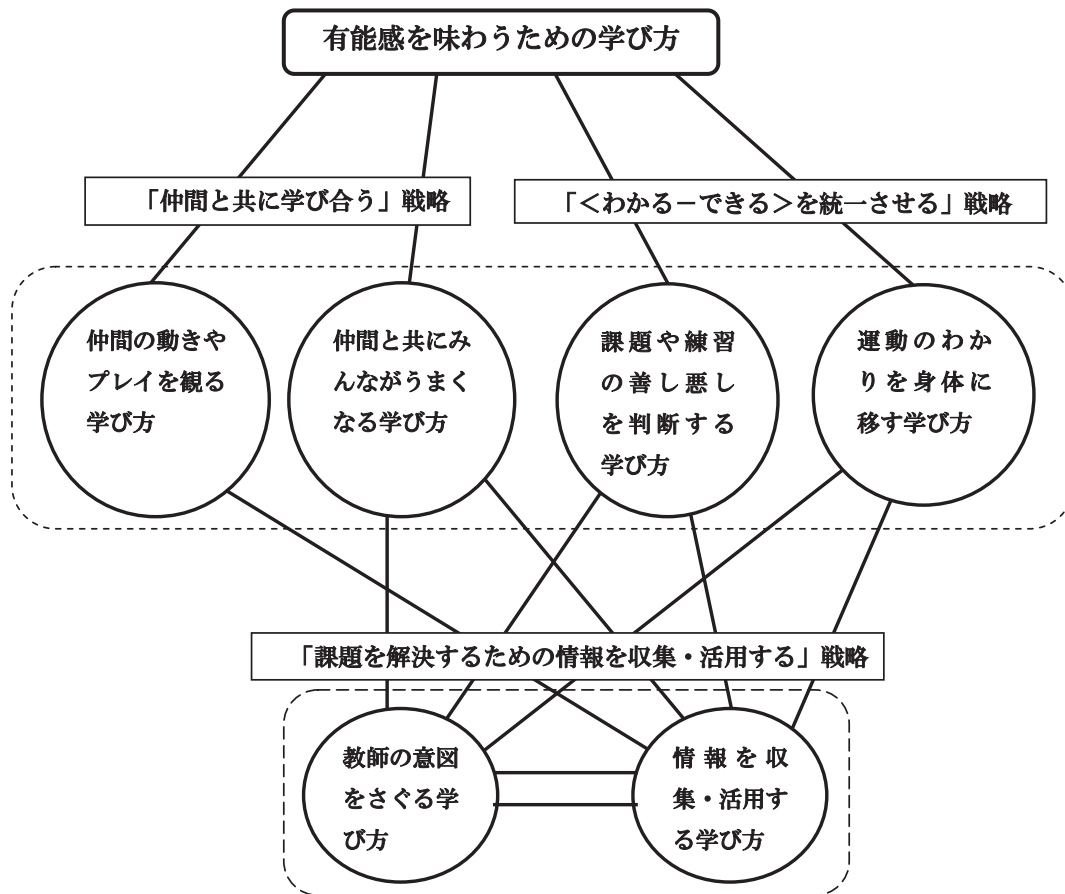


図1 重回帰分析からみた学習戦略モデルの構造

間の動きやプレイを観る学び方 (C4)、「仲間と共にみんながうまくなる学び方 (C6)」、「課題 (めあて) や練習の良し悪しを判断する学び方 (C2)」、「運動のわかりを身体に移す学び方 (C5)」の4つの学習戦術 (学び方) の成分により機能しているとする結果であった。とりわけ、C4成分とC6成分より、「仲間」と共に有能感を味わっている構えの強いことが認められた。また、C2成分とC5成分は、課題の把握とその身体化を示すことから、「わかるーできる」を統一しようとする構えも強いことが認められた。これらのことから、「有能感を味わうための学び方 (C1)」は、次に示す学習戦略により発揮されるものと考えられた。前者は「仲間と共に学び合う」戦略であり、後者は「<わかるーできる>を統一させる」戦略である。他方、「情報を収集・活用する学び方 (C1)」と「教師の意図をさぐる学び方 (C7)」の1つの学習戦術 (学び方) の成分は、「有能感を味わうための学び方 (C1)」と直接的な結びつきは認められなかった。そこで、「情報を収集・活用する学び方 (C3)」と「教師の意図をさぐる学び方 (C7)」の2つの学習戦術 (学び方) をそれぞれ目的変数に置いた重回帰分析を再度行った。表3には、C3成分の結果を、表4にはC7成分の結果をそれぞれ示している。

表3ならびに表4より、「情報を収集・活用する学び方 (C3)」と「教師の意図をさぐる学び方 (C7)」は別個な

関係でなく、有意な結びつきのあることが認められた。具体的には、いずれの学び方も課題を解決するための情報を収集・活用するところに共通性が認められた。これより、これら2つの学習戦術 (学び方) の相互作用を「課題を解決するための情報を収集・活用する」戦略と解釈することにした。

その他の説明変数を見てみると、C3成分およびC7成分に共通した変数として、「仲間と共にみんながうまくなる学び方 (C6)」、「課題 (めあて) や練習の良し悪しを判断する学び方 (C2)」、「運動のわかりを身体に移す学び方 (C5)」の3つの学習戦術 (学び方) が取り出された。このことは、「課題を解決するための情報を収集・活用する学び方」戦略が「仲間と共に学び合う」戦略と「<わかるーできる>を統一させる」戦略の下層に位置し、これらの学習戦略を下支えする働きを有することを示しているものと考えられる。

図1には、重回帰分析の結果より考えられた学習戦略モデルを示した。これより、本調査対象の生徒たちは、体育授業において運動がうまくなってきた成就感や満足感、努力すればできるようになるとする自信や自覚といった有能感を味わう学習戦略が形成されているものと考えられた。

今後、図1の学習戦略モデルを活かした授業実践の方

法を検討していく必要がある。

IV. 要約

中学2学年の生徒768名を対象に、彼らの体育授業における学習戦術(学び方)を主成分分析により明らかにし、それらの学習戦術(学び方)成分の構造を重回帰分析により検討した。その結果、「有能感を味わうための学び方」の成分を中心に、これを下支えする2層の学習戦略が明らかとなった。すなわち、一つは「仲間と共に学び合う」戦略と「<わかる一できる>を統一させる」戦略であり、もう一つは「課題を解決するための情報を収集・活用する」戦略であった。

これらのことから、現在、中学2学年の生徒は、明確な学習戦略をもって体育授業に望んでいることが確かめられた。

—注—

- 1 本研究では、学習者の能力の違いに応じた学びの技術を明らかにしようとする考えから、「学習戦術」を学びの戦術(学び方)と定義し、「学習戦術(学び方)」と表記することにした。併せて、幾つかの「学習戦術」を組織的・計画的に駆使する学び方を「学習戦略」と定義し、両者を区別した。その上で、主成分分析の結果において得られた成分因子を「学習戦術(学び方)」とした。
- 2 体育科の授業に関する内外の実践と研究を長年にわかり掲載してきた教育雑誌に「体育科教育(大修館書店)」がある。そこで取り扱われた特集(1970年～2015年)を通覧すれば、体育科における学力とそれを高める学習方に関しては、下記に示すように1980年代に集中していることが認められた。
 - ・体育における「学力」と学び方学習(1983年9月号)
 - ・運動技術の教え方、学び方(1985年10月増刊号)
 - ・新しい体育の授業研究(1987年6月号)
 - ・自ら学ぶ力を育てる(1996年2月号)

—文献—

- (1) 厚東芳樹, 長田則子, 梅野圭史「アメリカの Teaching Expertise 研究にみる教師の実践的力量に関する文献的検討」『教育実践学論集』11, pp.1-13, 2010
- (2) 小林篤『体育の授業研究』大修館書店, pp.170-222, 1978
- (3) 梅野圭史, 辻野昭「体育科の授業に対する態度尺度作成の試み—小学校低学年児童について—」『体育学研究』25(2), pp.139-148, 1980
- (4) 奥村基治, 梅野圭史, 辻野昭「体育科の授業に対する態度尺度作成の試み—小学校中学年児童を対象にして—」『体育学研究』33(4), pp.309-319, 1989

- (5) 鐘ヶ江淳一, 江原武一, 高橋健夫「生徒による授業評価の検討(1)」『体育科教育』33(5), pp.52-56, 1985
- (6) 鐘ヶ江淳一, 江原武一, 高橋健夫「生徒による授業評価の検討(2)」『体育科教育』33(6), pp.52-56, 1985
- (7) 鐘ヶ江淳一, 江原武一, 高橋健夫「生徒による授業評価の検討(3)」『体育科教育』33(7), pp.56-61, 1985
- (8) 梅野圭史, 藤田定彦, 辻野昭「体育科の授業分析—教授活動の相違が児童の態度に及ぼす影響—」『スポーツ教育学研究』6(2), pp.1-13, 1986
- (9) 梅野圭史, 中島誠, 後藤幸弘, 辻野昭「小学校体育科における学習成果(態度得点)に及ぼす教師行動の影響」『スポーツ教育学研究』17(1), pp.15-27, 1997
- (10) 辻延浩, 梅野圭史, 渡邊哲博, 上原禎弘, 林修「小学校体育科における学習成果(集団技能)を高める指導ストラテジーに関する事例的検討」『スポーツ教育学研究』19(1), pp.39-54, 1999
- (11) 上原禎弘, 梅野圭史「小学校体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究—学習成果(技能)を中心として—」『体育学研究』48(1), pp.1-14, 2003
- (12) 高橋健夫, 岡沢祥訓, 中井隆司「教師の『相互作用』行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について」『体育学研究』34(3), pp.191-200, 1989
- (13) 高橋健夫「体育授業研究の方法に関する論議」『スポーツ教育学研究』11, pp.19-31, 1992
- (14) 高橋健夫「子どもが評価する体育授業過程の特徴—授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係」『体育学研究』45(2), pp.147-162, 2000
- (15) 大友智, 清藤昭裕, 高橋健夫, 岡沢祥訓, 米田博行, 沢田啓二, 谷敏光「生徒の体育授業に対する愛好的態度が集団スポーツの学習行動に及ぼす影響」『スポーツ教育学研究』13(1), pp.25-34, 1993
- (16) 深見英一郎, 高橋健夫, 日野克博, 吉野聡「体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討—特に、子どもの受けとめ方や授業評価との関係を中心に—」『体育学研究』42(3), pp.167-179, 1997
- (17) 福ヶ迫善彦, スロト, 小松崎敏, 米村耕平, 高橋健夫「体育授業における『授業の勢い』に関する検討—小学校体育授業における学習従事と形成的授業評価との関係を中心に—」『体育学研究』48(3), pp.281-297, 2003
- (18) 山口孝治, 梅野圭史, 厚東芳樹「体育授業における教師の戦略的思考に関する一考察—ゲーム理論からみた教師の戦略的思考の観点の整理—」『体育・スポーツ哲学研究』28(2), pp.85-104, 2006
- (19) 山口孝治, 梅野圭史, 林修, 上原禎弘「小学校体育授業における教師の教授戦略に関する実践的研究—学習成果(態度得点)の高い教師を対象として—」『ス

- ポーツ教育学研究』29 (2), pp.33-55, 2010
- (20) 山口孝治, 長田則子, 上原禎弘, 梅野圭史「小学校体育授業における教師の実践的知識への介入が教授活動に及ぼす効果—教師の教授戦略と授業の『出来事』への気づきとの関係を中心に—」『教育実践学論集』13, pp.289-302, 2012
- (21) 長岡文雄『授業をみがく』黎明書房, pp.135-139, 1990
- (22) 竹内理『より良い外国語学習法を求めて』松柏社, pp.47-73, 2003
- (23) 池上哲也, 長田則子, 板倉健介, 山口孝治, 上原禎弘, 梅野圭史「体育授業における児童・生徒の学習ストラテジーの形成に資する学び方項目の作成—O'Malley & Chamotの学習ストラテジー研究を中心として—」『鳴門教育大学実技教育研究』20, pp.63-83, 2010
- (24) O'Malley J.M.& A. U. Chamot, *Learning strategies in second language acquisition*, Cambridge University Press, 1990
- (25) Oxford, R., *Language learning strategies: What every teacher should know*, Newbury House, 1990
- (26) Cohen, A. D., *Strategies in learning and using a second language vocabulary over time: Investigating the role of mnemonic associations*, *System* 8 (2), pp.221-235, 1998
- (27) 高橋健夫『新しい体育の授業研究』大修館書店, pp.9-21, 1989
- (28) 織田輝準「日本語の程度量表現用語に関する研究」『教育心理学研究』18, pp.166-176, 1970
- (29) 安田三郎『社会調査ハンドブック』有斐閣, pp.162-163, 1974
- (30) 岡沢祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」『スポーツ教育学研究』16 (2), pp.145-155, 1996

【資料①】(表中の項目番号：調査票で用いた番号であり、主成分分析表の項目番号)

ストラテジー分類属	典型的なラーニングスキル	体育授業におけるラーニングスキル	項目番号	体育授業における学び方
メタ認知ストラテジー	焦点をしぼる		1	体育の授業では、次の授業の課題(めあて)を予想して授業にのぞむようにする。
		学習の道すじと目標とのつながりを考えて、課題(めあて)を立てる。	2	体育の授業では、グループノート、個人カードを活用して自分たちの課題(めあて)をはっきりさせておくようにする。
			3	体育の授業では、課題(めあて)が違えば、それを解決する練習のしかたも違うことのわけに気づくようにする。
		教師の提示・暗示・示唆の内容を考えて課題(めあて)を立てる。	6	体育の授業では、自分の考える課題(めあて)が先生の指導内容と合っているのかいないのかを考えようとする。
			7	体育の授業では、先生の考える課題(めあて)を明確に知るようにする。
			8	体育の授業では、なぜそのような課題(めあて)で学習するのかについて考えるようにする。
			9	体育の授業では、自分の課題(めあて)をしっかりとおさえる。
		課題(めあて)の意味をわかって、課題(めあて)を立てる。	10	体育の授業では、なぜそのようなしかたで練習をするのか、また、なぜそのような順序で練習をするのか、考えるようにする。
			4	体育の授業では、練習のしかたの予想を立てるようにしている。
			5	体育の授業では、教材である運動が違えば、練習計画の立て方や練習の方法は、先生から教わる場合と自分たちで考える場合とがあることをわかっている。
	計画する	仲間の動きやプレイの観察のしかたを計画する。	11	体育の授業では、うまくなるためにうまくできる子とそうでない子を比較したり、うまくできる子はなぜうまいのかを観察をしたりするやり方を練習計画の中に入れる。
		12	体育の授業では、うまくできる子とそうでない子の違いを考えたり、うまくできる子はなぜうまいのかを考えたりして、自分たちで計画する。	
	学習資料やインターネットなどの情報を活用して計画する。	13	体育の授業では、インターネットで検索したり、教科書を開いたりして、教材である運動の特徴(ルール、作戦・戦術、技術)などを調べてみる。	
	練習内容の段階性を考えて計画する。	14	体育の授業では、教材である運動をどのように学んだらいいかの計画を立て、いろいろな運動のしかたや練習の方法を、先生が用意した学習プリントまたは書物(教科書を含む)やインターネットで調べたことを自分たちの立てる練習計画に生かす。	
	練習方法を選別をして計画する。	15	体育の授業では、これまでに学習した運動とどこが違うのか、また、どこが同じなのかをはっきり理解して練習のしかたの計画を立てる。	
		16	体育の授業では、いろいろな運動のしかたや練習の方法があることを知って、課題(めあて)に合った練習計画を立てる。	
	モニタリングする	学習の道すじからレビューする。	17	体育の授業では、これまでに学習した運動の経験から考え、今習っている学習に役立てようとする。(例・バスケットボールで学んだことをサッカーに生かす。走り幅跳びで学んだことを走り高跳びに生かすなど)
		18	体育の授業では、オリエンテーションで教わった計画の立て方を生かして、自分たちで考えた練習のしかたを工夫する。	
	学習成果からレビューする。	19	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、前の授業までの自分たちの学習の道すじをたどることによって、先生の授業のねらいに気づく。	
		20	体育の授業では、うまくなった方法から、課題(めあて)や練習のしかたの良し悪しを考える。	
	評価する	練習のしかたの良し悪しから理解度をチェックする。	21	体育の授業では、先生や仲間と話し合った運動のしかたや練習の方法の良し悪しを考える。
		23	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた予想や計画の通りにできるようになったかどうかを確かめる。	
	学習成果の良し悪しから、運動のしかたの理解度をチェックする。	22	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた課題(めあて)が解決したかどうか(うまくなったかどうか)を確かめる。	
		24	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、課題(めあて)の解決ができなかった時、どこまでできていて、どこからができていないのか確かめる。	

【資料②】(表中の項目番号：調査票で用いた番号であり、主成分分析表の項目番号)

ストラテジー分類	典型的なラーニングスキル	体育授業におけるラーニングスキル	項目番号	体育授業における学び方
認知ストラテジー	繰り返す	先生に教わったことを繰り返して身につける。 自分の運動を振り返り、うまくできないところを繰り返し練習する。	25	体育の授業では、習っている運動の動きやプレイが、いつでもどこでもできるようになるまで、練習したりゲームしたりする。
			30	体育の授業の終わりまで、良い動きや良いプレイを何度も練習して身につける。
			26	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、自分たちの立てた予想や計画の通りにできなかった時、休み時間や放課後を利用して練習する。
	組織化する	うまくなるために、運動の用語、知識、原理を理解する。	27	体育の授業では、教材である運動の構造(しくみ)を知って練習したりゲームしたりする。
			31	体育の授業では、うまくできない時、その原因を教材である運動の構造(しくみ)から考え、練習したりゲームしたりする。
			34	体育の授業では、教材である運動の構造(しくみ)の一番大切な内容を考え、練習したりゲームしたりする。
			28	体育の授業では、練習したりゲームする中で、教材である運動の最も大切な内容がわかる努力をしている。
			36	体育の授業では、練習の中で仲間の動きを比較して、うまくなるためのコツをはっきりと見つけ出そうとする。
			39	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、良い動きや良いプレイができるようになるわけを考える。
	推測する	練習の方法やしきたが課題(めあて)の解決につながっているかどうかを予想する。 どこまでできれば学習が終われるかを予想する。 うまくできないところを直すために、仲間の動きやプレイ、先生や仲間からのアドバイスをを用いる。	29	体育の授業では、自分たちの考えた練習計画が、課題(めあて)に合っているかどうかを確かめながら練習したりゲームしたりする。
			32	体育の授業では、練習したりゲームしたりする中で、今行っている練習の方法やしきたよりもっと良いやり方を考えようとする。
			38	体育の授業では、自分たちの動きやプレイが、どのようになれば学習が終われるかがわかって、練習したりゲームしたりする。
			33	体育の授業では、練習の「場の工夫」によって身につけた動きやプレイが、その「場の工夫」がなくなってもできるようになることを考え練習する。
			35	体育の授業では、うまくできる子たちの動きやプレイを見て、自分の動きやプレイの違いをさがし、練習したりゲームしたりする。
	要約する	うまくなるために必要な情報をまとめる。	41	体育の授業では、何度も繰り返しながらうまくなるためのコツを考える。
			43	体育の授業では、先生が用意した学習プリントまたは書物(教科書を含む)やインターネットで調べたことを本当に正しかったかどうかを確かめながら、練習したりゲームしたりする。
			47	体育の授業では、先生の用意した学習資料(教科書を含む)などにある絵や写真から比べ方を考えたり、練習している仲間の動きやプレイの観察から、比べ方を考えたりする。
			48	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、今日の授業を振り返り、課題(めあて)を解決する(うまくできる)ためのコツが身についたかを考える。
	演繹する	授業で学んだ良い動きや良いプレイ、または運動のしかたや学び方を他の授業場面にいかす。	53	体育の授業では、先生が用意した学習プリント、または書物(教科書を含む)やインターネットで調べたことを生かして、練習したりゲームしたりする。
			44	体育の授業では、前の時間までに習った運動の動きやプレイを、次の学習へつなげて、練習したりゲームしたりする。
			42	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、仲間の学習の道すじを知って、次の授業に生かすようにする。
			52	体育の授業で学んだ良い動きや良いプレイを次の授業へ生かそうとする。
	イメージする	良い動きや、良いプレイをイメージして、練習したりゲームしたりする。	45	体育の授業では、うまくなるために、仲間の動きをまねたり、ゲームの途中でプレイを止めてどうすべきだったか仲間と考えたりしながら、練習したりゲームしたりする。
			49	体育の授業では、うまくできる子の動きやプレイをいつも観察しながら、練習したりゲームしたりする。
			50	体育の授業では、うまくなるために、ビデオやデジカメなどを使って自分の動きやプレイを振り返り、練習したりゲームしたりする。
	転移させる	新しい運動教材を容易に解決するために、既習の学習を活用する。	51	体育の授業では、うまくなるために、仲間の動きやプレイを身ぶりや手ぶりをを使ってアドバイスしたり、仲間の動きをまねてアドバイスしたりする。
54			体育の授業では、うまくなるために、これまでに習った似たような運動の構造(しくみ)を考え、練習したりゲームしたりする。	
55			体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、良い動きや良いプレイができるようなルールを考える。	
推敲する	本時の授業内容を振り返り、次時の学習へとつなげる。 本時の学習の成果を明確に理解し、次時の学習へとつなげる。	56	体育の授業では、仲間の良い動きや良いプレイを観察するしかたを知り、他の運動場面に生かす。	
		61	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、今日の授業を振り返り、運動のしかたや練習の方法が良かったのか悪かったのかを考えて次の授業に生かす。	
		57	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、今日の授業を振り返り、自分たちの立てた課題(めあて)を解決できなかった(うまくできなかった)とき、足りない点や直す点を考えて次の授業へ生かす。	
		58	体育の授業では、自分がうまくできるようになったわけをはっきりと話しすることができる。	
		59	体育の授業の終わりの話し合いやまとめなどで、今日の学習で何が大切だったのかを考える。	
60	体育の授業では、課題(めあて)にあった良い動きや良いプレイをどのように身につけたのか、どのようにしてわかったのかのわけを考える。			

【資料③】(表中の項目番号：調査票で用いた番号であり、主成分分析表の項目番号)

ストラテジ分類属	典型的なラーニングスキル	体育授業におけるラーニングスキル	項目番号	体育授業における学び方	
社会・情意ストラテジー	協力する	仲間と共に課題(めあて)の解決をする。	62	体育の授業では、発表するときは自分の思い、考え、意見を素直に言うようにする。	
			63	体育の授業では、仲間とともにうまくできる楽しさやよろこびを味わうことを大切にしている。	
			64	体育の授業では、自分から進んで仲間に補助したり仲間にアドバイスしたりする。	
		仲間と考えを共有する。	65	体育の授業では、仲間の考えや意見を自分のものにしようとする。	
			66	体育の授業では、仲間の考えや意見が自分と違っていても、その考え方を大切にする。	
		仲間の考えや意見を大事にする。	67	体育の授業では、先生や仲間の話に注意を傾け、そちらを向いて話を聞くようにする。	
			68	体育の授業では、グループで話し合うとき、一部の仲間の意見だけで進まないように、自ら進んで意見を言うようにする。	
			69	体育の授業では、わがままや勝手な考えや意見が出たとき、その仲間に注意する。	
		自分や仲間の動きやプレイについて共に考えたり、アドバイスしあったりする。	45	体育の授業では、うまくなるために、仲間の動きをまねたり、ゲームの途中でプレイを止めてどうすべきだったか仲間と考えたりしながら、練習したりゲームしたりする。	
			49	体育の授業では、うまくできる子の動きやプレイをいつも観察しながら、練習したりゲームしたりする。	
			51	体育の授業では、うまくなるために、仲間の動きやプレイを身ぶりや手ぶりを使ってアドバイスしたり、仲間の動きをまねてアドバイスしたりする。	
		明確化の質問をためる	先生や仲間尋ねたり質問したりする。	70	体育の授業では、先生の課題(めあて)についての説明がわからないとき、質問する。
	71			体育の授業では、うまくできないとき、どこができていないのかを先生や仲間尋ねる。	
	先生や仲間の意見を自分の言葉にする。		72	体育の授業では、先生や仲間の考えや意見を自分の言葉にかえて理解する。	
	自己対話する	自分たちの学習活動が目標達成に向かっていくかどうかを自己対話する。	自分の動きやプレイを先生や仲間に見てもらおう。	73	体育の授業では、うまくできないとき、先生や仲間みてもらう。
				74	今日の体育の授業では、ここまでできるようになりたいとする目標を持って授業にのぞむようにする。
				76	体育の授業では、練習やゲームを重ねるごとに自分の動きやプレイがだんだんうまくになっていく自覚をもてるように努力している。
				78	体育の授業では、「あっそうか、わかった!」という発見のよろこびや、「やった、できた!」といううまくできたよろこびを自分の力で味わおうとする。
			80	体育の授業では、「あっそうかわかった」「こうすればいいんだ」という発見を忘れずに自分のものにする。	
			82	体育の授業では、学んだことは何度も繰り返し練習することの大事さを知る。	
			83	体育の授業では、課題(めあて)の持ち方、運動のしかた、練習の方法を学級の活動や生活に生かそうとする。	
			84	体育の授業では、先生からのアドバイスがなくてもこれまでに習った運動のしかたや練習の方法を生かして自分から進んでうまくしようとする。	
		目標達成に向かっていく中で発生する障壁を乗り越えているかどうかを自己対話する。	75	体育の授業では、どんな運動であっても、やる気をもって学習にのぞむようにする。	
			77	体育の授業では、うまくできる楽しさやよろこびを味わってやろうと思っている。	
			79	体育の授業では、あきらめずに何度も練習してうまくできるようになったとき、自信(自分もやればできる)やプライド(僕も大した人間だ)を持つ。	
			81	体育の授業で味わった楽しさやよろこびから自信(自分もやればできる)を新しい教材の学習につなげていく。	
	85		体育の授業では、うまくできるよろこび、運動のしくみがわかるよろこび、仲間と関わるよろこびの大切さを知って、それらのよろこびを自力で味わおうとする。		